

會報

鏡友會

第十一號

報

女子美術專門學校同窓會

第十二號

89

同窓會報

第二輯

女子美術專門學校同窓會

會報

女子美術學校同窓會

第七號

會報

報

女子美術專門學校同窓會

第十三號

15.12.11
特報
新校舎の完成
新校舎の完成
1910年刊
1911年刊

TEXNH 會 MAKPA 會 報

女子美術大学歴史資料室 ニュースレター 第11号

2017年10月31日発行

News Letter, vol. 11
University's Historical Resources Unit,
Joshi University of Art and Design

「何香凝芸術名作展」開催報告

岸本 紗和子 (女子美アートミュージアム学芸員)



【図版1】 何香凝《獅》大正3年（1914）
何香凝美術館蔵

今年の日中国交正常化45周年にあたり、来年には日中平和友好条約締結40周年を迎えます。この節目の年に、女子美アートミュージアムでは私立女子美術学校（現 女子美術大学）

の卒業生である何香凝（1878～1972）を紹介する展覧会「何香凝芸術名作展」を開催いたしました。本展は上野の森美術館からの巡回展（2017年9月6日～9月15日）になります。

何香凝は中国では女性政治家・芸術家として広く知られていますが、日本ではその名を知っている人は多くはないでしょう。何香凝は、女子美出身の芸術家で、1960年代には中

国美術家協会の会長を務めるなど、当時の中国美術界における時代の先駆けとなった人物です。【写真1】それと同時に、孫中山（孫文）の指導のもとで辛亥革命や反軍閥の活動に参加するなど、政治的な功労者としても、その偉大な功績とともに広く知られています。本稿では、何香凝と女子美の関わりなどを紹介するとともに、今回の展覧会の開催報告をしていきます。

明治19年（1886）に香港の裕福な家庭に生まれた何香凝は、幼少の頃より纏足を拒否し、勉学を好むなど古い慣習にとられない強い意思をもつ少女であったと言われていました。当時、上流家庭の女性は纏足をすることが当たり前であり、またそれがより良い結婚をするための条件でした。しかし、その時代にあって纏足をしていなかったことが縁となり、明治30年（1897）にアメリカ華僑の廖仲愷と結婚することとなります【註1】。仲愷は西洋の学問を学ぶ一方、詩や美術を好み、妻の何香凝は結婚後に夫を通じて学問や詩画を学びました。明治36年（1903）、夫の日本留学にともない来日した何香凝は、日本女子大学校（現日本女子大学）の日本語補修学校、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）予科を経て、明治42年（1909）に女子美術大学の前身である私立女子美術学校日本画科撰科高等科に編入しました。そして、来日後に日本亡命中であった孫文と出会ったことで、革命活動に参加するようになります。女子美へ入学することになったのも、中国国内での革命活動で用いる軍票などのデザインをするためであったと言

われており、実際、軍旗のデザインや刺繍を手がけていたそうです【註2】。

絵に関して、何香凝は留学前から、高剣父から中国の伝統的な画法を学んでいたようですが、正規の美術教育を初めて受けたのはこの私立女子美術学校でした。女子美では、明治42年（1909）から明治44年（1911）にかけて日本画を学びました。女子美では日本画家の端館紫川に師事し、その他にも学外で、日本画家の田中頼璋から学んでいました。

何香凝は明治36年（1903）の来日から、20年近くにわたり東京で過ごし、多くの日本の友人と深い友情を築きました。1920年代初めに広州へ戻ったあとも、画風やスタイルを変化させながらも晩年まで絵を描き続けました。

中国・深セン市には、何香凝作品を中心に収蔵、研究する機関として平成9年（1997）に設立された何香凝美術館があり、これは国内唯一の個人名を冠した国立美術館です。今回の展覧会では、何香凝美術館所蔵品から在日時代の4点を含む代表作40点と、何香凝の歴史的功績を紹介する写真12点を展示しました。

初期の作品には特に、日本で学んだ日本画の技法が存分に生かされています。何香凝の作品の中でも特に人々に好まれた作品に、大正3年（1914）制作

の《獅》【図版1】があります。これも初期の作品ですが、その毛並みの写実的で繊細な表現などには、動物画を得意としていた田中頼璋からの影響が強く見られます。その後、作品は次第に変化し、中国の伝統的な山水画や文人画の要素を多く含むようになります。しかし、その中にも日本画と中国文人画の融合を試みるような表現が多々見受けられ、それらが何香凝という芸術家の作品の印象を非常に独特で特徴的なものにしていけると言えるでしょう。

展覧会会期中、広州美術学院准教授の蔡涛氏を講師にお招きし、講演会「写実と写意：画家何香凝の画風の変化について」を開催し、学生をはじめ、学外からも多くの方が参加されました。また、講演会後に美術館ロビーにて行ったレセプションでは、大村智女子美術大学名誉理事長、楽正維何香凝美術館副館長、佐野ぬい元学長、岡崎温日中友好協会理事長、横山勝樹学長によるテーブルカットが行われました。多くの方にご参加いただき、日中国交正常化45周年の年にふさわしい華やかな開幕式となりました。

10日間という短い会期でしたが、授業利用も多数あり、鑑賞した学生たちにとっても大いに刺激になった様子でした。来館者からは、本展覧会で何香凝の作品を初めて見たという声が多く、その作品の迫力や繊細な



【写真1】 昭和3年（1928）、上海にて
何香凝美術館提供

筆遣いに驚く声も多く聞かれました。

本展覧会は、初めての母校での開催として、平成19年（2007）頃から計画が着手されました。しかし、平成22年（2010）に開催間際まで至るものの、日中間の政治的な関係悪化など様々な問題により延期され、実に約10年越しの開催となりました。

本展を通じて、日中友好に貢献できたことはもちろん、多くの女子美生、卒業生、市民の皆様が何香凝という女子美出身の素晴らしい芸術家を知っていただけたことを大変喜ばしく思っ

ています。この展覧会が、今後の女子美術大学と何香凝美術館との交流の新たな契機となることを願ってやみません。

最後になりましたが、本展覧会を開催するにあたりご尽力賜りました中日両国各界のみなさまに厚く御礼申し上げます。

【註1】 竹内理樺『何香凝の芸術活動—1930年代における美術を通じた抗日救国運動を中心に』言語文化、2013年

【註2】 廖承志『わが母何香凝とその絵』人民中国、1979年

展覧会名	何香凝芸術名作展	主催	何香凝美術館、女子美術大学
会期	2017年9月19日（火）～9月29日（金）	協力	（公社）日本中国友好協会
休館日	会期中無休	後援	中華人民共和国国務院僑務弁公室、中華人民共和国駐日本国大使館、日本国際貿易促進協会、（一財）日本中国文化交流協会、日中友好議員連盟、（一社）日中協会、（一財）日中経済協会、（公財）日中友好会館、日本華僑華人聯合總會、全日本華僑華人連合会、相模原市、相模原市教育委員会
開館時間	10：00～17：00（入館は16：30まで）		
入館料	入場無料		
会場	女子美アートミュージアム		

「女子美人物史展」開催

梁 丞延 (ヤン・スンヨン) (歴史資料室学芸員)



【写真1】「明治38年3月25日 普通科三年生」と墨書あり 河鍋暁斎記念美術館所蔵

女子美術大学歴史資料展示室では、現在「女子美人物史展」を開催しています(2017年10月25日～2018年3月11日)。本展では、本学創立110周年を記念して刊行された『女子美術教育と日本の近代：女子美110年の人物史』の中から、開校時に設置した日本画科・西洋画科・刺繍科・裁縫科と、戦後新設したデザイン科・工芸科教育の基礎を築き上げた教員たちに焦点を当てます。彼らが本学の教育者としてどのような面貌を見せたかを、本学所蔵資料と関係者所蔵資料などを通じて紹介します。

本学は、明治33年(1900)女子のための美術教育機関として創立されました。男女共学であった工部美術学校が明治16年(1883)に廃校、京都府画学校(現京都市立芸術大学)は

学校教育制度を整え明治24年(1891)頃から女子の入学を認めず、官立の東京美術学校(現東京藝術大学)も女子の入学を認めなかったため、本学は当時唯一の女子の美術学校として開校しました。日本画科・西洋画科の初代教員は、島田友春と磯野吉雄などの東京美術学校出身者です。彫塑科は初代校長であり東京美術学校教授の藤田文蔵が担当しましたが、生徒数が足りず蒔絵科とともに廃科。編物科・造花科・刺繍科の教員は大正5年(1916)吉田徳子・於田佐恵子・鶴田直子が各々担当します。編物科と造花科の教員については調査が必要ですが、初代刺繍科教員であった鶴田直子は、当初本学が求めた皇室技芸員、東京美術学校教授及び女子高等師範学校教授ではありませんでした。しかし、鶴田は、

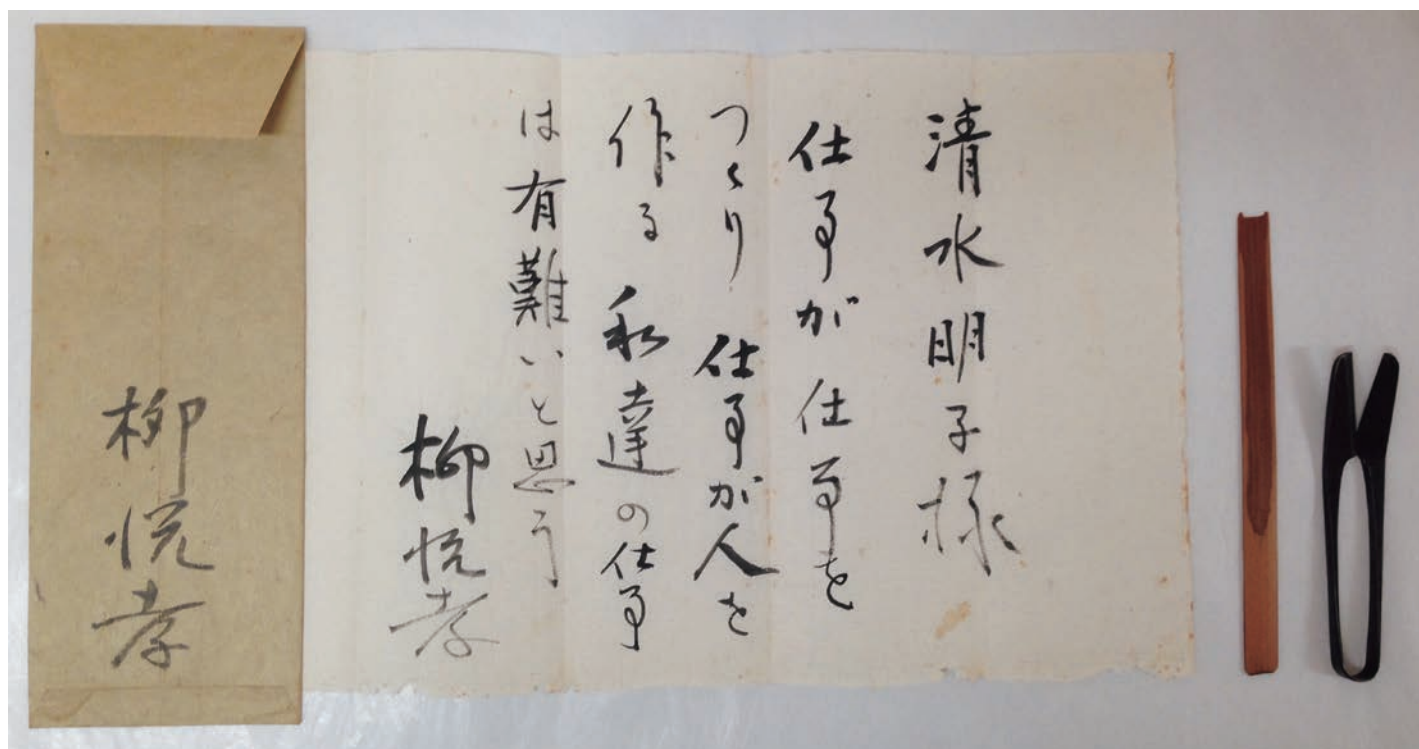
明治26年(1893)シカゴ万博、明治28年(1895)第4回内国勸業博覧会、明治33年(1900)パリ万博に出品、褒状を授与されており、専門家として本学に奉職しました。

女流画家として初期日本画指導に尽力をつくした河鍋暁翠は、明治35年(1902)島田友春の後任として就任します。彼らは幕末明治期に活躍した日本画家・河鍋暁斎の門人でした。本学に就任した頃の暁翠は、数え年で35歳。『大日本全国書画大家一覽』(明治25年)にその名が載る程、実力を認められていました。約3年の在職期間で、4名の教え子が美術教育に従事。河鍋暁斎記念美術館が所蔵する多くの卒業写真や記念写真類を通じて、教育に対する熱心さがうかがえます【写真1】。

大正5年(1916)西洋画科教

員に就任した岡田三郎助は、日本の洋画草創期を牽引した洋画家です。就任前から東京美術学校、本郷洋画研究所で指導を並行し、本学においても石膏デッサンと人体写生を重視した実物写生指導を行います。女子美では週一度か月に一度程の指導でした。しかし約20年の在職期間で教え子である甲斐仁代、深沢紅子、森田元子、三岸節子らが二科展、帝展などで初入選を果たし、本学入学前から岡田の門人であった森田元子が母校にて後輩を養成するなど、女流洋画家の先駆者たちを輩出します。

初期裁縫科教員を務めた赤沼八重と第2代刺繍科教員である松岡フコは、夫を亡くし本学に入りました。赤沼29歳、松岡27歳の時です。大正10年(1921)に長さ・質量を尺貫の単位とした尺貫法が廃止



【写真2】卒業時に卒業生全員に贈られた柳先生からの手紙と先生手作りの仕事道具 昭和44年（1969）頃 清水明子氏所蔵

され、度量はメートルが基本となります。赤沼を中心とした女子美術学校裁縫科研究会は、『メートル法に據る高等裁縫書』（全5巻）を、大正13年（1924）から昭和元年（1926）にかけて完成させます。その後、昭和7年（1932）に『現代和服裁縫書』を再編、昭和25年（1950）には『和服裁縫精解全集』を出版し、横書きに直し、挿絵を分かりやすくするなど時代に流れにあわせて教科書編集に力を入れます。また赤沼は、大正12年（1923）、本学の日本画科と洋画科を廃止しようとする動きに対し、絵画の学校の中での裁縫教育を主張、その反対運動を行いました。

松岡フユは、恩師・鶴田直子の後任として大正5年（1916）刺繍科に就任、約40年間本学の刺繍教育を守り育てた人物で

す。松岡は研究熱心で、教育内容の改革、120種余りの基礎縫と宝扇帯型を考案し、指導書の編纂などに尽力します。松岡考案の基礎縫120種は、現在本学の刺繍教育にも生かされています。

戦後昭和24年（1949）4月、本学は、新制女子大学としてスタートし、工芸科（翌年新設）と図案科が新設されました。

工芸科は民芸運動関係者たちが創立に関わり、その中、柳悦孝は34年間本学の工芸教育に携わり、第5代学長に就任した人物です。柳は手織りの授業を本学で初めて開始し、必要な道具や織り方などを学生自ら制作するように指導します【写真2】。教室は全学年が一緒に作業できる工房形式をとり、昭和32年（1957）から31年間毎年行われた染織工芸展（日本橋三

越にて開催されたので三越展とも呼ぶ）は、学生たちによる作品展・即売会で、実践的教育が行われました。

本学デザイン教育は、デザイン界を牽引した東京美術学校図案科出身者が中心となり、指導にあたりました。昭和29年（1954）に就任した松川蒸二は、チューリップやバラなどに隠されている何か（something）を考察し、学生各々の感性で再構築させる松川ビジョン・コースを担当します。河野鷹忠が演出構成、松川が創作指導にあたった「バラの服装ファンタジア」発表会は、新聞や雑誌などにおいて女子美デザインが広く紹介されるきっかけを作りました。

本展を通じて彼らが築き上げた教育精神を知っていただければ幸いです。

参考文献

女子美術大学歴史資料室編『女子美術教育と日本の近代：女子美110年の人物史』女子美術大学、2010年
『女子美術大学百年史』女子美術大学、2003年
大崎綾子「女子美術大学と刺繍教育」『テクネマクラ』第7号、2014年
清水明子「柳悦孝先生と女子美工芸教育」『民藝』667号、日本民藝協会、2008年7月
原聖・清水明子・小澤美樹子「民藝運動と女子美術大学工芸科」『柳悦孝のしごと：民藝運動と女子美工芸草創期』女子美術大学美術館、2007年
田中正明「女子美術大学」工芸財団編『日本の近代デザイン運動史：1940年代-1980年代』ぺりかん社、1990年

中国近代女性教育と日本人女性教員—春田政子—

小川 玲美子 (歴史資料室学芸員)

何香凝 (1879～1972)、羅慧錫 (1896～1948)、陳進 (1907～1998)。女子美には最先端の芸術や技術を学ぶために中国や韓国、台湾から日本に渡ってきた留学生が数多くいました。一方で、女子美を卒業したのち、海外で教育活動に携わった女性たちがいたことはあまり知られていません。本稿では池本達雄氏よりご教示いただいた資料を参考に、女子美で得た技術や知識を大陸に伝えた人物を紹介します。

日清・日露戦争後、中国(当時の清国)は日本が行ってきた近代的な教育制度に着目します。その結果、日本の中学校令を参考とし、明治37年(1904)に「奏定学堂章程」を制定しましたが、このなかでは女子教育は認められておらず、公的に女性が教育を受けられたのはそれから3年後でした。

明治34年(1901)に文部省から公布された「高等女学校令施行規則」を手本とし、中国は明治40年(1907)、「女子師範学堂章程」を發布して本格的な近代女子教育制度を定めます。ここでは日本の女子教育制度同様、刺繍、編物、造花などの、いわゆる手芸科目が含まれていました。これらの規則に先駆け、日本人女性教員が中国に招聘されていました。

本学で長く教鞭を執っていた戸野みち糸(1870～1944)は、大陸に派遣された初の日本人女性教員の一人です。戸野は東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)を卒業した後、明治37年(1904)に湖北幼稚園の「教習」として湖北省に派遣されました。この時、中国に派遣された女性教員は5人^{【註1】}。戸

野は湖北省に中国で最初となる幼稚園「蒙養院」を設立し、帰国後の大正4年(1915)に私立女子美術学校教頭となりました。戸野の派遣以降、明治39年(1916)頃から、日本人女性教員が中国大陸の各地に次々に派遣されました。なかには一部の裕福な中国人が、私的に日本人の家庭教師を雇っていたという記録も残っています。

熊本県出身の春田政子(1887～不詳)は、長崎県の活水女学校(現活水女子大学)初等科を明治37年(1904)に卒業し、翌年、私立女子美術学校刺繍科撰科普通科に入学しました。明治40年(1907)女子美を卒業した政子は、中国と緬甸(現ミャンマー)の国境近くにある干崖(現雲南省)に渡ります。この土地を治めていたのは土司である刀安仁という人物でした。土司とは、清王朝が隣接する諸民族の支配者たちに授けた官職の総称です。そこで政子は、刀家の二人の令嬢の家庭教師として、「女子師範学堂章程」に倣って裁縫や造花、音楽を教えたとされます。刀氏は教育に関して先進的な考えを持っており、政子は『九州日日新聞』明治42年(1909)7月6日の記事において、刀氏を「余程文明的の思想を有った人で自ら日本の東京に出て嬢様二人をも実践女子学校に入学せしめた位の人」と評しています。

政子の労働条件は仕度料が100円、月に70円の3年契約。当時の国家公務員の月給が約50円ということを考えると、この報酬は恵まれていたといえるでしょう。

中国における政子の暮らしぶりは、「珍しき干崖風俗」と題



春田政子と刀家の令嬢(画面中央で立っている女性が政子か)
国立国会図書館憲政資料室蔵 大江卓関連資料178
「雲南滞在の二及び帰途 第六綴」

した、『九州日日新聞』の3回の連載^{【註2】}が伝えています。ここからは干崖地域における人々の生活と、異国での政子の苦労の一端を垣間見ることができます。干崖ではインフラや医療が発達しておらず、政子は、女子美の校医であった篠田せい子に「万一の折に用ゆる薬品の調整と其使用法とを依頼^{【註3】}したとされます。

刀氏は自分の娘たちに最新の女性教育を受けさせていましたが、一方で、良妻賢母を求める中国の伝統的な女性観を持っていました。事実、彼の二人の娘は生活範囲を制約されており、他人、特に家族以外の男性と対面できず、医師にも顔を見せることが許されなかったとされています。そのような地域において、政子が近代的な女子教育に従事していたことは興味深い事

実です。彼女が具体的にどのような教育を施し、刀氏の娘たちにいかなる影響を与えたのかは詳らかにはなってはいません。歴史資料室では今後も、海を渡って教育活動に従事した卒業生の足跡を調査していきます。

【註1】明治35年(1902)にも1人派遣されている記録があるが、公的なものではなかった。

【註2】明治42年(1909)7月6日～8日掲載記事。

【註3】田村三次『活動せる実業界の婦人』博文館、明治41年、99頁。

【謝辞】本稿でご紹介した資料は日暮里富士見坂を守る会の池本達雄氏よりご教示いただきました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

2016年10月～2017年9月

2016年10月

- 女子美術大学同窓会企画展「刺繍をまなぶ」図録掲載のために画像提供。

2017年2月

- このまちアーカイブス〈高円寺・中野〉編への掲載のため画像提供。

4月

- 平成29年度入学式にて、学校史パネル展示。(東京・中野サンプラザ)



入学式パネル展示

- 平成29年度前期企画展示「写真にみる女子美の歩み一本郷から和田まで」開催。



展示風景

- 相模原キャンパス2号館224教室前にて「写真にみる女子美の歩み一本郷から和田まで」展関連写真パネル展示。



相模原パネル展示

6月

- 埼玉県立新座総合技術高校生徒インターンシップ受け入れ。



インターンシップ生作業の様子

- 平成29年度第1回歴史資料整備委員会開催。

- 女子美術大学同窓会設立100周年を記念し、「女子美術大学歴史資料室アーカイブ」を開設。校友会・同窓会会報誌12冊をWeb上に公開。(詳細は下記参照)

8月

- 女子美オーラルヒストリーアーカイブとして津森和治元職員へ相模原校舎移転時のカリキュラム改革についてヒアリング実施。



津森和治氏

- 博物館実習生4名受け入れ。

9月

- 平成29年度第2回歴史資料整備委員会開催。
- 東京家政大学博物館特別企画展「辰五郎と滋の見た明治の衣生活大転換」(2017年10月19日～11月24日)のため《女子改良服》貸出。

女子美術大学歴史資料室アーカイブ公開

歴史資料室では、女子美術大学同窓会設立100周年を記念し、所蔵会報誌アーカイブを一部公開しました。

大正6年(1917)、私立女子美術学校(現女子美術大学・女子美術大学短期大学部)と私立佐藤高等女学校(現女子美術大学附属高等学校・中学校)両校共通の校友会「鏡友会」発足を機に、それまで自発的だった組織を整え、正式に私立女子美術学校「同窓会」が発足されました。大正9年(1920)には、『女子美術同窓会会報』と『女子美術学校鏡友会会報』が創刊されますが、鏡友会は、戦後、付属高等学校・中学校の生徒会として機能することとなりました。

今回公開する会報は、『校友会雑誌』第八号をはじめ、『同窓会会報』第七～八号、第十一号、第十二～十四号、一～二輯、『鏡友会会報』第十一号の12冊です。少しでも多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

サイトURL：<http://joshibihistory.tumblr.com/magazine>



アーカイブサイトトップ(2017年10月時点)

News Letter, vol. 11-6 寄贈報告

2016年10月～2017年9月

作品・資料をご寄贈いただいた方のお名前を記し、感謝の意を表します。(御寄贈順)

- 佐藤泰彦氏 『順天堂の系譜 佐藤家関連書簡集』等 3冊
- 高尾みつ氏 多田美波先生作品設置時記録写真アルバム 1冊
- 内田理彦氏 『昔日佐倉拾遺録』上、下 2冊
- 荒木慎也氏 『石膏デッサンの100年』 1冊
- 山田明子氏 芸術学部洋画科昭和41年(1966)卒業アルバム 1冊
- 清水澄江氏 学校記念品等 10点
- 長塩滋子氏 『服装造型』(復刻版、1981年)、授業教材ビデオテープ等 3点

歴史資料の寄贈について

女子美術大学歴史資料室では本学の学校史・教育に関する歴史資料の収集を行っております。収集にご協力いただける場合は、歴史資料室までご連絡ください。ご厚意に沿えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。また、ご寄贈いただいた資料の取り扱い、歴史資料室に一任ください。

News Letter, vol. 11-7 委員紹介

平成29年度 歴史資料整備委員会 委員紹介 (任期 平成29年6月～平成31年5月)

- 委員長 原 聖 (歴史資料室室長、芸術学部教授)
- 副委員長 広瀬 晴美 (芸術学部准教授)
- 委員 鹿島 繭 (短期大学部准教授)
- 八木なぎさ (短期大学部教授)
- 小川 桂子 (外部嘱託委員)
- 谷口 秀子 (外部嘱託委員)
- 馬場 章 (外部嘱託委員)
- 玉田里佳子 (事務職員)
- 内藤 幸江 (事務職員)

News Letter, vol. 11-8 表紙写真

校友会・同窓会会報

大正6年(1917)－昭和18年(1943)

現在、歴史資料室に所蔵されている校友会・同窓会会報のなかで最も古いものは、今から100年前の大正6年(1917)に刊行された『女子美術学校校友会雑誌』第八号です。これら会報は、退職した教員、卒業生の状況や、当時在学していた女子美生たちの学校生活をうかがうことができる貴重な資料です。歴史資料室ではこの八号を含む12冊をweb上で公開しています。(7頁参照)



『女子美術学校校友会雑誌』第八号 大正6年(1917)

テクネ・マクラ 「芸術は永し」

TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室 ニュースレター 第11号

発行日：2017年10月31日

編集・発行：女子美術大学歴史資料室

制作・印刷：株式会社 日相印刷

女子美術大学歴史資料室

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階

TEL：03-5340-4658 FAX：03-5340-4683

E-mail：heritage@venus.joshihi.jp

URL：http://www.joshihi.net/history/

【正誤表】

下記の通り誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

頁	訂正内容
5 頁 4 段目 上から 14 行目	小澤美樹子 → 大澤美樹子